

第二章

住民意識の変化

大口町には、戦前の大口村出身である前田功^{まえだ いさお}氏の日記が残されている。ここでは、前田氏の日記から、戦争体験や村の様子を見ていく。

第一節 『前田功日記』と戦前・戦後の大口

前田功氏の経歴と『前田功日記』

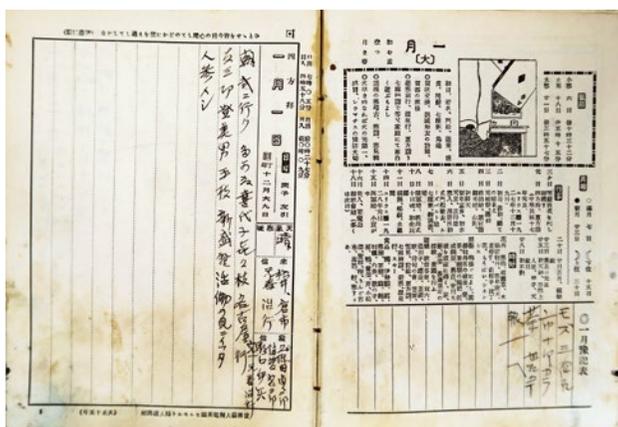
日記の筆者である前田功氏は、一九一三（大正二）年三月に大口村で生まれた。前田家は農業及び桑問屋を営んでおり、前田功氏も戦前から戦後にかけて、農家として地区の中心的な役割を担い、一九八二（昭和五十七）年二月に六十八歳で亡くなった。

その一方で、前田氏は三度にわたる出兵経験を持つ。一九三三年には徴兵検査を受け、満州へ出兵した。その後、一九三七～四〇年にかけて、日中戦争のため中国へ出兵し

た。帰郷後、一九四四年には内地勤務として兵庫県淡路島へ再び出兵し、一九四五年八月の終戦後、大口村へと戻った。

『前田功日記』は、

一九二八年から一九八一年（うち一九三八年と一九四〇年分は欠落）までと、長期間まとまって残されている（3-2-1）。年によって使用している日記帳は異なるが、基本的には農民日記が用いられ、日々の収穫物・



3-2-1 『前田功日記』（1928年1月1日）

農作業など農業に関する記述が主である。しかし、その中には当時の世相や地区の運営に対する考えも多く綴^{つづ}られていく。また、出征中であつた一九三七年の日記などは陣中日記であり、戦闘の様子をはじめ、戦線の最前線に立つた彼の、緊迫した胸中が吐露されている。

『前田功日記』の特徴

『前田功日記』の特徴は、大きくわけて三点ある。第一に、三度にわたる従軍を経験しており、戦地での生活や、一兵士の考えを知ることができる点である。特に、日中戦争では第三師団歩兵第六連隊に所属しており、兵士の活動を知る上で貴重な史料である。また前田氏は、常に戦局の推移や同郷部隊の活躍に関心を持ち、日記に綴っている。在郷中の村の戦中の様子や、戦後の復興への道のりを見ること出来る。

第二に、戦中・戦後にかけての大口村(町)の移り変わりを、住民の目を通して見ることができる点である。前田氏は、地区の農事組合などの役員を務め、供出の割当や祭事において中心的な役割を担っていた人物である。そのため、地区の様子を知ることができるのである。また、地区

の神社や隣町にあつた映画館といった、当時村周辺にあつた建造物と住民の関わりや、祭りの様子もしばしば記述がある。

第三に、戦中・戦後における地域の農業の様子がわかることが挙げられる。戦中においては、米・麦・芋・野菜の供出が確認できる。特に野菜については、前田氏は隣町の青果市場だけでなく、名古屋枇杷島^{びわしま}市場まで出荷に行つており、重要な産業であつたことがうかがえる。

農業のほかには、養蚕・養豚がおこなわれ、戦後になると、酪農や、杉・檜^{ひのき}といった山林苗の生産が始まっている。このように、農業を主としつつ、他の産業をあわせながら生活していたことがわかるのである。

第二節 戦争の経験

前田氏は三度にわたる出兵経験を持つ。このうち、二度目は日中戦争で、一九三七（昭和十二）年七月に大口村を出て名古屋第三師団歩兵第六連隊に属した。中国での任務は長く、帰郷したのは一九四〇年十一月であった。続くアジア・太平洋戦争でも、一九四四年八月に召集令状が届き、三度目の出兵となった。今度は内地であり、兵庫県淡路島にて、糧秣りょうまつの確保に携わっていた。

日中戦争への出征

一九三七年七月七日、盧溝橋事件を契機として日中戦争が勃発した。前田氏は、新聞などから情報を得ているように、「北支事変、拡大化の様相（一九三七年七月十一日条）」や、「愈々日支全面的衝突の危機迫る（一九三七年七月十四日条）」など、欄外に事変の推移を書き留めている。

七月十五日深夜、大口村を含む愛知県下に動員令が出された。『前田功日記』には、「昨夜深更遂に動員下令さる」と見出しが書かれ、「朝、果然動員令の話で三々五々寄話の

み」（一九三七年七月十六日条）とある。村内では、航空・野砲・高射砲が対象となり、八名が応召した。

続く八月十四日に起こった第二次上海事変では、第三師団（名古屋）・第十一師団（香川県善通寺）・第十四師団（栃木県宇都宮）に動員令が出されている。

このうち第三師団は、八月十八日に先遣隊が出発し、十九日には歩兵第六連隊を含む第五旅団などが名古屋港から上海へ向けて出港、二十三日には揚子江より上陸を果たしている。歩兵第六連隊の戦闘被害は甚大で、八月二十三日（十一月八日までに死者九八七人・負傷者一九一〇人）を出した。特に八月二十三日から三十日にかけておこなわれた上陸作戦では、五二七人ものが死者が出ている。村内でも、日中戦争による被害は戦死者二七名、戦病死者一〇名とされており、被害は大きなものであった。

召集令下る。待に待った召集令だ。俺は勇躍出郷せん。見よ俺の意気を。午後十一時半、令状を受領す。（一九三七年八月十四日条）

応召出發す。吾か意気を見よ。痛快だ、何とも云へぬ

胸がすーっとした。家より万歳に送らる。午後三時家、集合。挨拶を受け、三明神社参拝午后四時神明社に五名共集合終る。真紅の襷、歓呼の声。そして俺は軍歌の音頭を取る。此の意気を見よ。(中略) 神よ皇軍を守り給へ。其の声は全国民の祈りだ。(後略)(一九三七年八月二十日条)

村内でも応召が続き、八月十四日、二十四歳であった前田氏に召集令が下った。「待に待った召集令だ」と、前田氏は意気込みを綴る。村を出発した二十日条を見ると、まず地元の氏神である三明神社に参拝し、その後隣の集落にある神明社に共に出郷する仲間と集った。赤い襷と出征を見る送る歓呼の声に囲まれ、前田氏は自ら軍歌の音頭をとる。「此の意気を見よ」、「神よ皇軍を守り給へ。其の声は全国民の祈りだ」と記述は続き、応召した前田氏が、意気揚々と出征する姿が印象的である。

南京陥落

大口村を出発した前田氏は、同郷の仲間と共に名古屋第三連隊に入隊した。射撃訓練や兵器検査、予防接種などを

おこなった後、十月六日に名古屋を出発した。七日、使役兵のため先遣隊として出帆し、瀬戸内海を経由して十一日に揚子江から上陸した。上陸後の『前田功日記』には、腐乱死体を見かけたことや街並みの様子、戦闘があったことが書かれ、生々しい記述が目立つ。

この頃、陸軍は上海派遣軍と第十軍の指揮を統一し、中支那方面軍を編成した。この部隊は、十二月十日に南京への総攻撃を開始し、十二日には南京城への入城と掃討戦をおこなっている。第三師団のうち、前田氏が属する歩兵第六連隊は、この南京攻略戦には参加しておらず、入城もしていなかったようである。

会報に依り敗残兵の身体検査をなす。(通行人にして十才―五十才マデの男にして腕に予防注射の跡のある者は皆正規兵との事で嚴重に検査せり) 本日のみにても数名発見せりと聞く。午后五時南京占領の萬歳を三唱し祝賀す(一九三七年十二月十五日条)

前田氏は、敗残兵の発見とその捕獲を主な任務としていた。十四日条には、「南京遂に落つ」と見出しをつけ、朝日

新聞の南京入城を報じた記事が挟まれている。

一九四〇年分の日記が欠落しているため、除隊となった経緯は不明であるが、十一月には村に帰郷していたことが確認できる。前田氏はその後、再び農業に邁進まひんしていくこととなった。

アジア・太平洋戦争と大口村

一九四一年十二月八日、真珠湾攻撃を契機として、アジア・太平洋戦争が勃発した。『前田功日記』には、「今暁未明西太平洋に於て、米英と戦争状態に入る。長らく呼ばれた日米未来戦は、遂に現実となり火蓋は切られたり。畏くも英米に対し宣戦の詔勅下る」（一九四一年十二月八日条）と記述がある。また、開戦と共にラジオも戦局を伝えるようになり、国全体で戦時気分が高められた。

アジア・太平洋戦争において、大口村では一七四名の戦死者と七六名の戦病死者を出したとされる。帰郷後、大口村にて農業に従事する前田氏であるが、戦局や中国へ出征している郷土部隊について、しばしば日記に思いを綴っている。

我郷土部隊、重信部隊長の率ゐる江西省に作戦し、撫州も崇仁も宣黄も占領、猛進撃を重つゝあり。想へば我らの部隊もずい分と躍進したものだ。南昌方面の作戦に出るとは夢だに思はなかつた（一九四二年六月十二日条）

山本司令長官、南太平洋上に於て機上指揮中壮烈な最期。元帥に列し国葬の栄、大勲位功一級を賜ふ。昨年八月以来海軍も相当な激戦をしてゐるように思へて居たか、遂に本年四月山本長官の戦死を見、国民斉して「撃ちて止まむ」の意気昂る（一九四三年五月二十一日条）

アツツ島に血戦二旬、山崎部隊長以下二千数百名遂に玉碎す。うらみは深し。アツツ島十万余に余る敵、其優勢絶対的なものに対して良くも戦つて下さつた。一億挙つて兄らの霊を安んぜんには置かず。「撃ちて止まむ」我も時局の重大さをつくゝと痛感。ぢつとして居られないような感で一ぱいだ。俺で間に合ふなら今一度銃が執り度い（一九四三年五月三十日条）

ミッドウェー海戦以降、日本の戦局はこう着状態に陥り、

次第に暗雲が立ち込める。アツツ島での玉砕（一九四三年五月）を報道で知った前田氏は、「我も時局の重大さをつく／＼と痛感」と、戦局の悪化を認識している。そして、「ぢつとして居られないような感で一ぱいだ。俺で間に合ふなら今一度銃か執り度い」と、再び前線に立つことを望むようになった。

一方、大口村から出征した兵士が戦死し、英霊として村に「無言の凱旋」（一九四三年十二月十九日条）が増え、前田氏も、共に日中戦争を戦った仲間の公葬にも参列するようになる。

アジア・太平洋戦争は、開戦当初は戦勝を重ねていたが、次第に戦局が悪化すると、村内でも意気揚々としていた雰囲気が変わっていった。同郷部隊でも、前田氏の同年代の仲間が戦死し、村での公葬が度々あったことが『前田功日記』からも確認できる。前田氏は、既に二度の出兵経験があるが、戦局の悪化や同郷部隊の死を憂い、もう一度前線に戻ることを望む程であった。

農・商業に対する意識の揺らぎ

帰郷後、前田氏は戦局の悪化や同郷部隊の「無言の凱旋」

を嘆きながら、農業に従事していた。しかし、次第に就職を考えるようになり、一九四二年九月より名古屋造兵廠鷹来製造所（鷹来工廠）に就職した。

鷹来工廠は、一九三九年に熱田製造所の分工場として愛知県春日井市に建設された。七・七耗（黄銅製）や九九式普通実包を製造した工廠である。また、一九四五年八月十四日の空襲ではパンキン爆弾が投下され、工廠の五〇％が被災した。戦後は、名城大学の敷地となっている。

前田氏は、鷹来工廠の守衛として就職し、隔日で勤務をしている。時には、枇杷島市場へ収穫物を出品してから登廠するなど、守衛勤務と農業を一日交代で繰り返す日々が続くのである。

八時上番表門六番を服務す。（中略）自分の心に鞭をあてつゝも時間が過ぎるばかりである。俺は思ふ、せめてもと「家に帰って農に十二分に活きた仕事をなさんと」、それより今の俺に歩む道なし（一九四三年四月二十三日条）

我村も皇国農村となり、どうしても農なら農、勤労者

ならば勤労者と一本立とならねばならぬ時来る。つらく
と思ひを致す時、俺は農に戻る必要があるを感ず。俺の
境遇から割り出すとどうしても二股を止めねば村に居れ
なくなるやらも知れない（一九四三年八月一日条）

入職以来満一ヶ年を経過す。此の間、幾度か退職して
農に帰るべく決心したかも知れなかつたか、どうしても
二ヶ年は勤めなくてはならぬとて今月に至る。職業とし
ては悪いとは思はぬか、時節柄増産の道を一手に引受け
るか本当でないかと思ひ、又夜勤はどうも身体に思はし
くないかとも考へ、今迄にない後手な考を致す今日であ
る。（一九四三年九月一日条）

「標準農村」大口村

鷹来工廠に就職した前田氏であるが、一九四三年を迎え
ると、次第に農業に専念すべきか、という悩みが生じた。
その背景には、当時大口村が「皇国農村」に指定されたこ
とがあるだろう。「我村も皇国農村となり、どうしても農な
ら農、勤労者ならば勤労者と一本立とならねばならぬ時来
る」と述べ、「俺は農に戻る必要がある」（一九四三年八月

一日条）と決心している。

前田氏が農業へと専念する背景には、戦前の農業政策が
関わっている。一九四三年四月七日、農林省農村計画委員
会は、標準農村設定要綱を決定し、全国で計三〇三町村が
指定された。

大口村も標準農村に指定さる。県下で第一に。愈よ 我
ら農民も皇国農民の意識に燃へて、大奮斗せねばならな
い。俺も^⑤の寿命短きか？（一九四三年九月二十八日条）

河村さんに解雇して貰ふよう申出す。しかし、まあ暫
く辛抱せよとの事で一日勤務に服すを決心し東門に服務
す。河村さんは大口村の事情（標準農村）故、帰農せね
ばならない事は判つてゐる。だが、簡単にやめるとなれ
ば他に影響するから左様心得よと話あり（他に転向した
い者多数ある模様あり。此の点幹部は頭を痛めてゐる。
（一九四三年十二月二十八日条）

『前田功日記』によれば、大口村が県内で一番に指定され
たとあり、前田氏も「皇国農民の意識に燃へて、大奮斗せ

ねばならない」と、農業への熱意が書かれている。

また大口村では、一九四三年度に「大口村農業会」を設立している。農業会は、国防国家体制の中で国策の推進機関として、貯蓄の増強・食糧増産と、これに必要な資材・肥料などの配給、農産物の集荷、供出などが業務であった。

一九四一年十二月に開戦したアジア・太平洋戦争は、村内のみならず、全国の生活を大きく変えた。大口村でも、衣料切符制が開始され、米などの穀物類や金属の供出が定められた。

特に一九四三年は、前田氏にとって、どう生きるのが国や大口村、そして自分のためであるのか、苦悩する一年であった。日中戦争への出征経験や、同郷部隊の活躍、悪化する戦況の焦りから、「今一度銃か執り度い」という思いを強くする。その一方で、勤務する鷹来工廠を辞め、農業一本で生きていきたい気持ちも内包した。その背景には、日々食糧難となっていく現状や、大口村が標準農村に指定されたという、村の事情があった。前田氏は、供出の割当を決める会合に出るなど、村の中心的な人物であり、自身率先して農業にまい進したいという気持ちがあったのではないだろうか。

三明神社

『前田功日記』にしばしば登場する三明神社(3-2-2)は、大口町大御堂一丁目三千番地に現存している(第三編第三章第一節)。

戦前の大口村大字大屋敷の地区民にとって、この三明神社はどのような存在だったのだろうか。

一九三七(昭和十二年)、前田氏は他の地区民と共に神社の年行司を務めており、例えば六月には、神社の寄付金集めなどをおこなっている。そして八月二十日、日中戦争のため中国へ出征することとなった前田氏は、家を出発するにあたり三明神社に参拝をしている。地区内で出征する兵士にとって、一番に参詣する神社だったのである。

一九三九年九月以降、毎月一日を興亜奉公日とすることが定められ



3-2-2 三明神社 (2018年撮影)

た。これは、国の国民精神総動員法に基づく施策であり、国民は神社参拝や宮城遥拝^{ようはい}などが義務づけられた。一九四一年の日記では、興亜奉公日には、三明神社に参拝していたことがわかる。

アジア・太平洋戦争下では、一九四二年一月、毎月八日を大詔奉戴日とすることが定められ、一月八日から開始された。

大詔奉戴日。記念すべき此の日、各戸は日の丸掲揚。三明社に於て大詔奉戴記念式。先づ大詔を奉読、其后武運長久祈願の千度参り。寒氣凜烈^{りんれつ}ではあつたが大詔を拝聴して居るうちに何となく力の盛り上がるものがある。(一九四二年二月八日条)

旧正月の元日なり。今年こそ俺は大地を踏みしめ、万遺憾なきよう進み度い。先ず先祖に決意を告げ、本年をお願い。三明社にぬかずき、国家の隆昌と出征兵士の武運長久を祈願。併せて我家を護らせ給へと切に祈念す。二の宮様へは小雪チラツクなかを一人で参拝す。此処でも戦捷^{せんせつ}を希ふ人々で一杯である。(一九四二年二月十五日条)

前田一君戦傷の報に三明社前に全区民集合、快癒祈願を行ふ。再起奉公一日も早からん事を切に祈る。(一九四二年六月三十日条)

二度目となる二月八日条からは、大口村大字大屋敷の様子をうかがい知ることができる。各戸で国旗を掲げ、三明(神)社に地区民が集い、大詔奉戴記念式が挙行された。式では、まず大詔を拝聴し、その後千度参りをおこなったようである。

以降、『前田功日記』を見ると、毎月八日の大詔奉戴日には三明神社に赴いていることが確認できる。また、二月十五日は旧正月にあたるが、この日にも三明神社に参拝している。

三明神社は建立されて以来、大屋敷地区にとつての拠り所であった。『前田功日記』では、日中戦争やアジア・太平洋戦争下において、しばしば三明神社が登場し、身近な存在であったことがうかがえる。大屋敷地区から出征する兵士にとつても、銃後の村民にとつても、戦時中の三明神社は、精神を支えるために必要な存在であった。

名付けから見る戦前・戦後

前田功氏は、妻輝子（一九四一（昭和十六）年二月九日挙式、十一月十九日婚姻届提出）との間に五男をもうけている。『前田功日記』には、子供の誕生や名付けについても記述があるが、名前の由来には当時の世相を反映したものが見られる。ここでは、第一子から第三子までの名付けを紹介したい。

第一子は、一九四二年十二月十二日に誕生した。当時、前田氏は、農業に従事する傍ら、鷹来工廠の守衛として勤務していた。

頭に第二世の名をあゝとも思ひこうとも思い登廠。どうもこれならとは決心がつかない。結局十二月入り生として大詔奉戴一周年よりか八紘一宇よりか名を得るのが最も意義が深いではないかと思ふ。子の幸を祈るのに余りで仲々に名もむつかしい（一九四二年十二月十四日条）

我二世に紘一と名命す。八紘一宇より名を採り。八紘一宇、大精神ノモト聖戦力大東亜各地ニ展開サレテイル。コノ大理想ニ完遂スル人デアルコトヲ希フ余リ紘一ト命名ス（一九四二年十二月十九日条）

前田氏は鷹来工廠へ登廠しながら、生まれた男児の名付けに悩む姿が見られる。候補には、「大詔奉戴一周年」・「八紘一宇」が挙がっている。

「大詔奉戴」は、一九四二年十二月八日に宣戦の詔勅が出されたことを記念し、翌年一月二日の閣議決定を経て制定された。毎月八日を記念日とし、同月八日より実施された。『前田功日記』によれば前田氏は、大詔奉戴日には三明神社に参拝していたようである。「八紘一宇」は、戦時中、対外侵略をおこなう日本の精神的なスローガンとして広く用いられた言葉であった。しかし、紘一と名付けられた第一子は、一九四三年一月二十日に夭逝してしまう。

次に前田家に男児が誕生するのは、一九四四年七月二十五日であった。前田氏は日記に、「午前十時、男子を分娩す。幸にして健かなり、我安心した。第一特に馳せ向ふか出来得る」と記し、第二子の誕生を喜んでいる。

三十一日になると、第二子を正利と名付けた。日記には、「正しい勝利」の一語より」とその由来を書いている。「今こそ正しい勝利を獲得すべき秋なりを信じて。勝利こそ正しい者の頭上に輝くを信じて」とも記している。

この頃の戦局は、六月十五日にサイパン島に米軍が上陸、七

月七日には日本軍が玉砕している。日記には七月十八日条にて、大本営発表の模様を書いている。前田氏自身も、この頃の時局に対して、

何処へ行っても我欲の話のみで、時局戦局に対する必勝の信念の無いのに情なさを感じず。果してこれで良いのであらうか。今なを第一線で苦戦してゐる戦友を思ふとたへられない想なり。(一九四四年七月十二日条)

と述べており、戦勝祈念と、郷土部隊が前線で戦っていることへの思いが強かったことがうかがえる。日本の勝利を願って正利と名付けられたが、八月三日に天逝してしまった。

このように、戦前に生まれた子供の名付けには、「八紘一宇」や「大詔奉戴」、「戦勝」といった、戦局を意識したものであった。

戦後、前田家に男児が誕生するのは一九四六年八月十五日、奇しくも終戦から一年たった日であった。

男子出生す。午前九時に。今度のは格別に元気か好きそうなり。何とかして大きく成人させ度い。名も善隣友好の友好と着けたいと思ふ。(一九四六年八月十五日条)

名を新生と命名す。八月十五日生れなので新生日本の意味を以て、しかも俺として今度こそは育て上げる覚悟なので新しい出発点と名付けた訳だ。一寸珍しい名なり。(中略)新生の幸あれ。俺か新生と決心したまでには二つ名があった。新生日本と善隣友好なのだ。結局八月十五日を記念すると共に、此の子こそ俺の新生なりと考へて(一九四六年八月二十一日条)

終戦から一年経って、前田氏は名前の候補に「新生日本」と「善隣友好」を挙げている。「新生日本」は、戦後日本が復興する際のスローガンであるし、「善隣友好」とは、中国をはじめとする諸外国と友好的な関係を結び直そうとする考えである。

このように、戦時中の「八紘一宇」や「大詔奉戴」、「正しい勝利」といった、戦局や日本の戦勝を祈念する名付けから、敗戦後の日本が復興することを願うものへと、変化していったのである。

第三節 終戦と戦後復興

三度目の応召

一九四四（昭和十九）年六月十五日、三十一歳であった前田氏は鷹来工廠たかきこうしょうを退職した。退職後は「皇国農民」として食糧増産に努める筈であったが、八月に再度、応召される。この年の年末には、一年を振り返って「昭和一九年を送る。今年には造兵廠もやめ、専ら食糧増産に挺身ていしんせんとし、て地力増進に銳意力を注いでゐたのに、八月応召となり、母と輝子とに任す事となった。女のみ二人でずい分と苦勞したらしかった」（一九四四年十二月三十一日条）と述べている。

今度は内地勤務であり、当初は初年兵の教育を担当していたが、十月二十九日に飛行場大隊の編成員として、豊場にある豊場飛行場（現県営名古屋空港）に赴いた。そして十一月中旬、淡路島の榎列えなみに駐屯し、経理室勤務で販売所委員助手となった。みかんや酒、煙草といった様々な食糧を手配し、部隊に分配する役割を担っている。

終戦と帰郷

一九四五年八月十五日正午、前田氏は、兵庫県淡路島で終戦を迎えた。

大東亜戦争遂に終る。我血涙を呑む。此の日正午天皇陛下御親しくマイクに立たせられ、国民に注ぐとの題目勅詔を下さる。丁度井上旅館に来てゐて襟を直して拝承したが、此の無条件降伏は心外であり残念なるもこれ以上抗戦も出来ず、日本民族のタメとの聖諭なり臣ら一億血涙と共に恐懼只々再建の為全力を尽さんを誓ふ。俺の思ふに結局は戦力の差であり、我ら矢折弾丸尽きてなを残った者齊しく東洋へを忘れず大日本を建設の必要ありを痛感す（一九四五年八月十五日条）

出張先の大阪にあった井上旅館で、襟を正して放送を聞いた前田氏であるが、無条件降伏の理由を、「結局は戦力の差」であったと分析している。その上で、「我ら矢折弾丸尽きてなを残った者齊しく東洋へを忘れず大日本を建設の必要ありを痛感す」と述べ、既に戦後の国のあり方を考えるなど、前向きな姿勢が見られる。

八月二十四日、前田氏は除隊となり、三十一日には大口村に帰郷した。親戚回りなどを終え、九月三日からは米の配給を受け、農作業に従事し始めた。

戦後の政策に対する意識

早やくも10月となる。世相も愈よ深刻になって来たようだ。内閣も施策はつきりとせず、どうやら短命内閣の模様なり。政局不安定で山積せる諸問題及施策か案ぜられる。どうやら玉碎しても無条件降伏でも同じに結果はなるようだ（一九四五年十月一日条）

思ひ起す大詔奉戴日なり。本八日未明に眞珠湾の攻撃の火蓋は切られたり。此の日大きな失手か打たれ、日本民族が暗黒面に落されたのだ。今日の新聞には米軍司令部の発表による第二次戦乱の始めよりの奉天事件より、ミソリー停戦協定迄の記事が出る。日本として実に残念な事だ（一九四五年十二月八日条）

日本史上の大変革の年。敗戦と言ふ現実の前に、何もかも破壊され新しい民主主義的に生れんとしてゐる。

国家的には天皇制廃止の論も出、経済的には財産税とか利得税などで空前のインフレを防かんとしてゐる。一方主要食糧の米は四十年振りの不作で供出も容易ではない。社会的の不安益々深刻の度を増して行くばかりなり（一九四五年十二月三十一日条）

農業の道に戻った前田氏であるが、戦後の内閣について、意見を書き留めたものが見られる。例えば、十月一日には、戦争について玉碎でも無条件降伏でも結果は同じだろうと推測している。

同年十二月八日、大詔奉戴日について思いを綴（つづ）っている。一九四一（昭和十六）年十二月八日の眞珠湾攻撃を思い起こし、「此の日大きな失手か打たれ、日本民族が暗黒面に落された」と評価する。開戦当初の高揚した戦争への熱意と比べ、意識が大きく変化している。

社会党への期待

一九四六年四月、戦後初の衆議院議員選挙がおこなわれた。

新日本建設の日。民主日本を世界に表現する日なり。早朝より出足早く予想以上の好成績の投票振りなり。でもまだ旧勢力を婦人連まだ無意識に支持してゐるらしい。全く婦人連は駄目なり。我家は全部社会党（一九四六年四月十日条）

今日は愈よ開票なり。民主日本の政治分野の決定する日なり。情報は、俺の言ふ社会党は第三党なりと。依然として民衆は頭が変らぬらしい。正午の報道に早くも尾崎行雄と女の代議士として 氏が決定す。我区も晩方に至り加卜勘〔加藤勘十 日本社会党〕トップで白木が続いてゐる（一九四六年四月十一日条）

四月十日の投票日、前田氏は「新日本建設の日。民主日本を世界に表現する日なり」と述べており、戦後初の総選挙への関心が高い。また、日本社会党を支持しており、新しい「民主日本の政治分野」は、社会党に担って欲しいようである。

兵士の身で終戦を迎えた前田氏は、戦争に対して、敗戦の原因を戦力の差であると考察し、政府に対して責任を問

う必要を感じている。一九四五年の年末には、アジア・太平洋戦争の契機となった真珠湾攻撃を、日本が「暗黒面」に落ち、大きな「失手」であったと評していた。日中戦争やアジア・太平洋戦争の勃発時とは打って変わって厳しい評価へと変わったのである。

また興味深いのは、前田家が戦後初の総選挙において、社会党に投票している点である。戦後日本の立ち直りを早いうちから考え、民主主義の体現のために社会党を推した。『前田功日記』には、この他、天皇制や貨幣制度、憲法などにも言及した記述も見られた。

『前田功日記』から見えるもの

『前田功日記』は、戦前に大口村に生まれ育った、農民の日記である。この日記を読み解くと、戦前・戦後にかけての大口村や暮らしの様子を知ることが出来る。また前田氏の出兵中には、戦地の様子をはじめ、戦場の最前線に立つた一兵士の、生々しい戦闘記録が残る。

一九三七年に勃発した日中戦争により、前田氏は第三師団歩兵第六連隊として、中国へ出兵した。村を出る日、日記には「吾か意気を見よ」と書き留め、意気揚々と故郷を

出発する姿があった。しかし、終戦後の一九四五年十二月八日には、真珠湾攻撃によって日本国民は「暗黒面」に落とされた、と戦争への意識が大きく変わった。

その背景には、二度にわたる出兵経験があった。大口村を含む愛知県は、名古屋第三師団に属したが、この師団は大きな被害を出しており、村内でも戦死者の公葬がしばしばおこなわれた。前田氏は、村にあっても、郷土の仲間の死を受け止め、日記に残していた。

一方、戦争によって村の様子が変化したことも、前田氏の意識に影響を与えた。特に、一九四三年に村が標準農村に指定されたことは大きい。既に米をはじめ様々な供出を強いられており、食糧増産のためにもと帰農を考え始めたのである。

戦前の村の様子は、村が発行した公報や回覧板、新聞記事などから、うかがい知ることができる。しかし、『前田功日記』は、大口村で生まれ育った一農民の日記であり、住民の立場から村の移り変わりを見ることができた。

個人の日記は各地方自治体に寄贈され、地方史の研究として役立てられることが多い。『前田功日記』についても、ご子息である前田新生氏が、大口町へ寄贈した。

